

13. 虹 (ミンダナオ)

昔々、ミンダナオのマノボの人々は、彼らの簡素な生活を改善するために、神々に願って、古代の儀式を行うことを習慣にしていました。

その頃、何年も健康と繁栄の祝福を受けていた幸せな夫婦がいました。しかし、彼らの生活に一つ重要なことが欠けていたことが、彼らを不幸にしていました。彼らには子どもが与えられなかったのです。

ついに、その夫婦は村のまじない師の所へ行き、彼の助けを頼みました。彼は、その夜遅く、特別な儀式を行い、多産の女神に捧げものをして、彼女の助けを頼むつもりだ、と助言してくれました。女神が今度は、至高の神ミッドランバグに、彼らの毛外をかなえるように頼むことになるわけです。

そして、その夜遅く、子どものいない夫婦は、村の中心にある、大きなパチパチ音のする火の回りに、まじない師や部族の他の人々と一緒に集まりました。

村の楽隊は、彼らの酔わせるような太鼓や金属のゴングや竹の棒での演奏を始め、神々を呼びました。すると、何十人もの褐色の、土地の兵士たちが、革のサンダルだけで、競技場に入り、赤々と燃える炎の周りで、声をそろえて、踊りだしました。彼らのたくましい体と荒々しい顔は、野生の樹液で作られた、白、赤、黒の絵の具で飾られていました。彼らの頭は、雄鶏の羽でできた踊りの冠をかぶっていました。彼らの首周り、くるぶし、手首には、色鮮やかな、ビーズや宝石が着けられ、踊りの炎の光の中で、輝いていました。片手には、彼らは動物の皮や鶏の羽、そしてほかの羽で飾られた盾を持ち、もう片方の手には、長く鋭い槍を持ち、これも羽で飾られていました。これらの誇り高く、堂々とした兵士たちは、彼らのゆらめく炎の周りで踊ったり、はねたりすることは、本当に印象的な光景であって、頭を上げたり下ろしたり、足で地面を踏み鳴らしたり、官能的な、ゴムのような体で、太鼓やゴングにあわせて、くねらせたり、グイッと動かしたりしていました。

兵士たちが火の周りで魔術のような儀式的踊りを踊っている間に、村の女性たちのグループは、かれらの後ろに立って、カリスマ的な聖歌隊の合唱をして儀式を進め、霊たちに彼らのことを聞くように招くのでした。歌と物音が大きくなって、夜がふらふらする、魔法にかけられた音楽をとも

なって、森を取り巻く暗闇に満ちたものを着るように、熱狂させました。

この酔わせるような儀式の間に、まじない師は食べ物やぶどう酒、薬草などを多産の女神に捧げました。踊りと歌と奉納が完了すると、みんな、豪華なご馳走を分け合い、たくさんのぶどう酒を飲みました。

儀式が行われ、神様たちはまじない師の呼びかけを聞きました。そして、本当に、その翌年には、その夫婦には、美しい女の赤ちゃんが生まれ、ブルントと名づけられました。

ブルントは、美しい容姿に恵まれただけでなく、優しさ、しとやかさ、自然への思いやりと愛を持っていました。彼女は、村で最も賞賛される若い少女に成長しました。

ブルントは、自然の女神を愛し、村の最も美しく豊かな庭を管理しました。彼女は、もっとも魅力的で色鮮やかな植物や花を育てることができる神秘的な才能を持っていました。彼女はまた、どの花が、毎日庭を訪ねてくる鳥や蝶たちを気に入っているか、自然の安息の地に彩りと生命を与えているか、正確に知っていました。

ブルントの庭への没頭と、彼女の自然理解能力のために、村人は、解除を込めて、彼女のことを「花の女王」とあだ名をつけました。

ある明るい、太陽の輝く朝、ブルントは、庭の花の手入れをし、色鮮やかな蝶たちが花から花へ跳って、鳥たちがさえずって、ハミングしているのを見ていました。

ある若いすてきな男性が村を通りかかり、すぐにブルントのしとやかな声に魅了されました。その声は、村を通り過ぎるそよ風に運ばれていたのです。

その青年が、そのしとやかな歌声の源を見つけて、庭の色鮮やかな花に囲まれている美しいブルントを見た時、彼は自分の目を信じることができませんでした。彼は今までに、こんな素晴らしい、気取らない東洋の美しさをもった少女を見たことがなかったのです。彼女が植物を育成するしとやかなやり方も、彼女が非常に優しく、面倒見が良い女の子であることをその若者に告げているようでした。その若者にとって、それは一目ぼれでした。

その若者はこの機会を逃すことはできず、すぐに

フィリピンの神話と伝説

若い女の子に、彼自身の自己紹介をしました。最初、若い男性の大胆さに驚いていました。しかし、彼女の目には輝きがあり、顔には暖かな微笑が明らかにあって、彼女はその若者に引きつけられたのです。

その日から先、若者は毎日、ブルントの庭を通り過ぎて、ブルントは、この大切な時を、待ちきれませんでした。いや応なく、かれらはすぐに、お互い深く、情熱的な恋に落ち、今後お互いが別れていることなど考えられませんでした。

このブルントとすてきな若者との毎日のデートは、何ヶ月も続きました。そして、お互いに、会うことで彼らの愛を強く育てて行ったのです。しかし、これらのデートは、ブルントの両親はまったく知らないことでした。

ある日、若者はブルントへのいくつかの知らせを持って、美しい庭を通りかかりました。「私は両親に会うために帰らなければなりません。」と彼は言い、「そして彼らに、わたしたちの結婚への祝福をしてくれるように頼むのです。」

ブルントはその知らせに大変興奮して、彼女の心臓の鼓動は、高鳴りました。「どうぞ、私にあなたについて行かせてください。」彼女は困難しました。「私はひと時も、あなたと離れられません。あなたのご両親はどこにお住まいですか？」

その若者は、彼の両親について、ブルントに知らせる特別な秘密を持っていました。彼は、頭上高く青い空を指差しました。「あの上だよ。」と若者は言いました。

ブルントには理解できず、戸惑った表情で、彼女の恋人を見つめました。彼はブルントに微笑んで、さらに説明しました。

「私の父は太陽で、母は月なんです。」と彼は言いました。

この知らせは、ブルントを驚かせてしまいました。しかし、このことは、若者への彼女の気持ちを変えることはありませんでした。彼らは愛し合っていて、その事実だけがすべてだったのです。

「私は行って、あなたと行くことについてのわたしの両親の許可を得なければなりません。」ブルントは微笑んで、彼女のきゃしゃな足で、できるだけ速く、庭から彼女の家に走りました。

しかし、息を切らせたブルントが彼女の両親に、

その若者と結婚したいことを告げた時、彼らは恐怖に襲われ、二度と彼に会うことを禁じました。彼らは、唯一の子どもを大変愛しており、決して手放したくありませんでした。ブルントは神々の祝福によって生まれました。彼女は、かれらにとって、諦めきれない貴重な存在だったのです。

彼女の両親は、彼女の部屋にブルント鍵かけて、閉じ込めました。そこで、彼女は、すすり泣き、嘆きました。彼女の両親の、彼女に対する態度が理解できなかったのです。彼女は、自分の愛する男性との結婚を聞いて、喜んでくれると思っていたのです。

幾日も幾夜もの間、悲しいブルントは彼女の小さな部屋の中で、ひとりで泣いていました。彼女の恋人と離れて、長く会えないことに絶望的になっていました。彼女は混乱して、自分の食事さえ食べられないほどでした。

ついに、ブルントは弱って、食事を取らないために、病気になる、彼女の両親は、彼女の健康を心配しました。彼らは娘に食べるように勧めましたが、彼女は拒否しました。「私は、愛する男性との結婚を許可してくれるまで、一口も食べません。彼と生きられないのなら、飢え死にしたほうがましです。」

ブルントの両親は、彼女の苦しむのをこれ以上見ていられなくて、ついに態度をやわらげ、その若者と結婚することに同意しました。この時、ブルントは喜びの涙を流し、両親を暖かく抱きしめました。「ありがとう。」と彼女は叫びました。「お父さんとお母さんを、とても愛しているわ。」

数日後、結婚式が行われました。ブルントの両親は、すてきな新郎のとなり立っている彼らの美しい娘を誇りに思っていました。しかし、ブルントはもう彼らと一緒にいないことを知って、悲しくもあったのです。彼女はすぐに、彼らから永遠に離れてゆくことでしょう。

素晴らしい結婚式の跡で、みんなはブルントの大切な庭で行われるお祝いを楽しんでいました。お祝いの後で、新しいカップルは、青空への長い旅の準備をしました。そこは、すぐにブルントの新しい住まいになるのです。

新しいカップルが別れを告げるときが来て、ブルントは泣いている両親に近づき、抱きつき、彼らに口づけして、素晴らしい生活を与えてくれたことに感謝しました。彼女は庭の最も彩りのいい花で花束をつくり、やさしい微笑と、目に涙をうか

フィリピンの神話と伝説

べて、それを両親に渡しました。

そして、彼女は言いました。「私はあなた方から遠く離れて行きます。しかし、あなた方はいつも私の心にいるでしょう。私のことで深く嘆かないでください。私は、新しい生活で幸せになることを誓います。しかし、私のことで淋しく思う時は、いつでも、青空を見てください。私は微笑んで、あなた方を見下ろすでしょう。」

そして、新しいカップルは美しい庭を出て行きました。ブルントの母や花束をしっかりと胸に握りしめ、彼女の暖かな涙は、色鮮やかな花びらに落ちました。彼女の愛する娘が、遠くの地平線に、消えてゆくのを見ていました。

悲しんでいる母親のために、時間はゆっくり進みました。目覚めている時は、いつもかわいい子どものことを考えていました。ほんの一瞬でもいいから、無性に会いたくなりました。

何日も、何週間も、何ヶ月も過ぎて、ブルントの母や庭に座って、いつの日にか、彼女の愛する娘が帰ってくるのを心から願っていました。しかし、彼女はついに、彼女はもうブルントを自分の目で見ることはないのだという事実の痛みを、受け入れることにしました。

ある日、ブルントの母が雨の降った後の庭のなかを歩いて、花束を摘んでいると、彼女は娘が結婚式の日に、花束を渡しながら言った言葉を思い出しました。

目に涙をためて、ブルントの母や見上げました。日の照った青空の中に、彼女は心温まるものを見ました、それは彼女の愛する娘からの印でした。大きな輝く帯が、不思議な色をして、花束のように、雲から地面にかけて、アーチ状になっていて、あたかもブルントが両親に手を差しのべているようでした。ブルントの母は微笑み、色の帯を見るたびに、彼女はそれが、愛する娘が彼女に、自分が幸せで、母や父のことを忘れていないことを伝えている印だと知ったのでした。

この物語は、モノボの人びとが、虹はどのようにしてできたか、そして何故モノボの言葉で、虹を「ブルント」と呼ぶのかということ伝えるものです。